

Pinyo

動臨研 野生動物ニュースレター Vol.36



Contents

- ▶ 沖縄の絶滅危惧種を守る獣医療
— 種の保全から外来種対策まで — 長嶺 隆
- ▶ 外固定単独で野生復帰したチョウゲンボウ 河合紀人
- ▶ トビの骨折治療 藤倉直人
- ▶ 野生鳥獣保護管理基金協力者

沖縄の絶滅危惧種を守る獣医療 — 種の保全から外来種対策まで —



NPO法人 どうぶつたちの病院 沖縄

獣医師 長嶺 隆

近年、大規模な自然災害の発生に関する緊迫感が高まる中、災害発生時に家族とはぐれたペットの保護収容から施設内にとり残された家畜への対応や遺棄、逸走によって発生する放浪動物への対応が求められている。また高病原性鳥インフルエンザや口蹄疫、豚コレラ、SFTS は現実に発生し、家畜、野生動物、そして人間の間に発生する共通感染症に関する危機が高まり、狂犬病も隣国台湾で発生するなど対岸の火事と言ってられない状況である。

2019年、環境省は日本版レッドリストの中で3,732種の絶滅危惧種を選定し、哺乳類160種中33種、鳥類約700種中98種が絶滅危惧種に指定された。またペット由来の外来種による捕食や感染症によって生物多様性の崩壊が目前に迫っているのである。

こうした様々な問題は一言で言えば、地球の健康の問題であり、我々獣医師の果たすべき役割は重くなってきており、あらゆる分野で獣医学、獣医療を駆使した専門的技術が求められている。本稿では、琉球列島における絶滅危惧種の保全に関して、生息域内保全から飼育下繁殖さらには、制度的な構築に至るまでに獣医療や獣医師が果たした地球の健康への小さな一歩を紹介する。

沖縄島の北部のやんばる地域や八重山諸島の西表島は亜熱帯の常緑広葉樹林に覆われ、哺乳類、鳥類、両生類、爬虫類、昆虫類、植物の固有種が多く、生物多様性の宝庫と言われている。2016年この豊かな自然を保護するためやんばる地域が33番目、2017年には奄美大島が34番目の国立公園に指定された。現在、環境省は沖縄島北部（やんばる）西表島そして奄美大島、徳之島を含めた地域を世界自

然遺産への登録候補地の一つとして準備をすすめている。

しかしながら、現在、琉球列島の固有種である国内で唯一の飛ばない鳥ヤンバルクイナやアマミノクロウサギ、ケナガネズミやトゲネズミなどの希少種は絶滅の危機を完全に脱してはいない。生息数減少の要因は希少種を捕食する特定外来種ファイリマンダースの生息域への侵入やノネコによる捕食が大きな原因だと考えられている。また、生息域内において多発するイリオモテヤマネコ、ヤンバルクイナやアマミノクロウサギ、ケナガネズミの交通事故は絶滅を加速する要因だとして早急な対策が求められている。

2014年のヤンバルクイナの交通事故は47件発生した、これは生息数の約3%にのぼる。またヤンバルクイナやケナガネズミの救護や死体の発見は毎年約100件に上り、これらは全て獣医師による臨床検査と検案、DNAによる捕食者の特定や細胞保存および臓器の保存、外部寄生虫や消化管内寄生虫の検索等が行われ、死因を決定するプロセスが構築されており、保全策に活かされている。すなわち希少種の生息を圧迫する多くの課題を浮き彫りにし、具体的対策を提言し、施策に反映されている。外来種であるマンダースやノネコへの効果的な対策、絶滅危惧種の救護治療の技術開発、救護システムの構築、リハビリテーションから野生復帰の技術開発、飼育下繁殖への応用が期待されている。ヤンバルクイナにおいては飼育下繁殖に成功し、現在約80羽が飼育されている。獣医療は絶滅危惧種の域内・域外保全に大きく貢献しはじめている。



ヤンバルクイナの交通事故



ヤンバルクイナ交通事故、治療後の放鳥



国際的な希少種クロツラヘラサギの釣り糸被害



オオコウモリ 人工哺乳



クロツラヘラサギの放鳥



人工繁殖に成功したヤンバルクイナの親子



ヤンバルクイナの治療

外固定単独で野生復帰したチョウゲンボウ



公益財団法人 動物臨床医学研究所

獣医師 河合 紀人

チョウゲンボウ（長元坊、学名：*Falco tinnunculus*）は、ハヤブサ目ハヤブサ科に分類される猛禽類です。おもに、北海道、本州中部以東で繁殖し、また冬鳥として全国に渡来します。名前がとてもユニークですが、その由来には諸説あり僧侶だったり、蜻蛉だったりと言われています。

さて、年号が変わった令和元年の11月下旬に、左翼を負傷して飛べないチョウゲンボウが当院に搬入されてきました。左翼は下垂しており「中雨覆」の部分で出血が認められました（写真1）。同時に左翼のX線検査を行い橈骨と尺骨の骨折を確認しました（写真2）。

治療としてはまず罹患部の消毒を行い、その後外固定を実施しました。外固定はストレスによる衰弱をさけるためにできる限り短時間で行いました。まず副子でアライメントを整え、医療用テープを用い翼の不動化を目的として翼と胴を一緒に巻き固定しました（写真3）。その後は、全身麻酔下での外科的整復を計画しましたが、術前のX線検査にてアライメントが良好であり、また鳥自体もおとなしくケージレストできたので、外固定のみに切り替え抗生剤

を継続し様子を見ました。

搬入後13日目のX線検査では骨反応がしっかりみられ、またアライメントも良好でした。その9日後（搬入後22日目）では、しっかりとした骨の癒合を確認したため外固定を外し、野生復帰のための飛行訓練を開始しました（写真4）。

訓練としては、翼を写真1のように広げたり、戻したりというのを慎重に行いました。その後、翼の

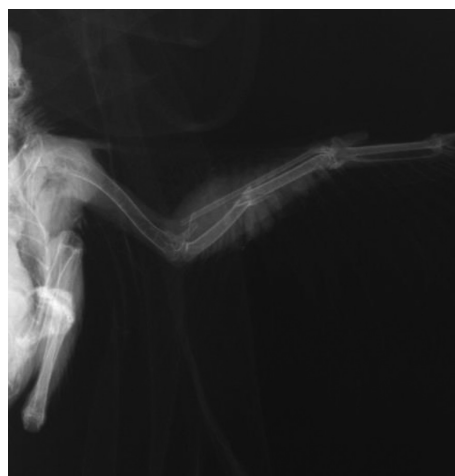


写真2 搬入時X線写真



写真1 搬入時



写真3 外固定後



写真4 搬入後22日

抵抗がある程度強くなった時期より足を保持して上下に動かし羽ばたきを促す運動を実施しました（写真5）。最終的には、10mほどの広い障害物のある屋内敷地で飛行させ、障害物をさけて飛べた時点で終了としました。チョウゲンボウはホバリングをする猛禽類なので羽ばたきに違和感がないかは特に重要になるため、リハビリ中の飛行姿勢に違和感がないかは注意深く観察していました。そして、搬入後38日目に放鳥としました。

野生鳥の骨折の搬入割合は16%程度と報告されており、そこまで多いわけではありません。骨折の原因としては窓や車両などへの衝突によるものが多いです。また、骨折した鳥の放鳥率は28%と低い傾向にあります。これは骨折が原因ではなく鳥類が搬入されてくる際にショック状態であることが多いことが考えられます。よって、搬入直後はなるべく短時間で診察、必要な処置を行うことが重要であり、まず可能な限りストレスを軽減し一般状態を回復させる必要があると思われます。今回のチョウゲンボウに対しても搬入初日は可能な限り短時間でストレスをかけなかったことが、状態の回復に進んだと考えています。



写真5 訓練中

鳥類の骨折に対して外固定で行うか、外科的に注射針やピンを用いた侵襲的な固定を行うかに関しては難しいところがあります。単純骨折で整復が容易であれば、外固定でも可能と思われませんが、基本的に搬入されてくる鳥は複雑骨折しているケースが多く、その場合は、外固定のみでは骨格のアライメントが不十分になる可能性があります。海外では、外固定単独の治療では予後不良となる可能性を高めると報告されています。ただ、今回は術前のX線検査での骨の状態と鳥の性格から外固定のみで可能と判断しました。

野生鳥獣の治療目的は生きることではなく、野生復帰できるかどうかです。自力で採食できるかどうか治療終了のポイントになっていきます。確かに、天然記念物や絶滅危惧種などでは断翼や断脚をおこなってでも動物を生かし、その後特別な管理施設や里親に送ることもありますが、多くの野生動物はそうではありません。今回も翼を動かせるようになることがゴールではなく、捕食できるほど自由に飛べるようになることを目標に飛行訓練を実施していきましたが、無事放鳥にいたりほっとしております。放鳥から数カ月経過した今も元気に羽ばたいていることを願っています。

トビの骨折治療



公益財団法人 動物臨床医学研究所

獣医師 藤倉 直人

2019年8月4日、境港市にて一羽のトビが保護されました。飛び立つことができなくなっていたところを保護されたようです。トビはタカ目タカ科に属し、タカ科の鳥の中では九州以北の水辺から山地においてもっとも一般的に見られる野鳥になります。全長は59～69cmほどで、カラスより一回り大きく、翼開長時には157～162cmほどになります。都市部では弁当など人間の食べ物をさらってしまってイメージがあるトビですが、郊外では主に動物の死骸やカエル、トカゲ、ネズミ、ヘビ、魚などの小動物を捕食して生活しています。

搬入時のレントゲン検査で右大腿骨の骨折が認められました(写真1)。骨折してから少し時間が経っていたのか筋肉が拘縮し硬くなり始めていました。

動けない状態だったため、食餌させながら状態の安定を優先しました。状態が安定したため、搬入から2日後に麻酔をかけながら手で骨折端を合わせ、ピンを用いて整復しました(写真2、3)。



写真2、3 整復終了後のレントゲン画像



写真1 搬入時のレントゲン画像

その後、順調に仮骨の形成は進んでいきましたが、残念ながら骨折整復後も右脚の反射は戻ってきませんでした。しかし、処置後3週間経った頃には片脚のみでも高い止まり木まで飛び移ることは可能になっていました。

搬入から1カ月経った頃、骨も完全に癒合(写真4)し、部屋の中を元気に飛び回ることが可能になったため、抜ピンを行いました(写真5、6)。その後、

右脚の反射は完全に戻ってはいませんでした。飛翔能力や元気食欲に問題ないことを確認し、搬入から45日後に放鳥となりました。

野生鳥獣の多くはペットと違い、症状が出てから時間が経って搬入されることが多々あります。今回のケースのように骨折してから時間が経っている場合、骨折自体の整復は可能でしたが、骨折後に傷ついた神経まで完全に戻すことはできませんでした。ただ、手術を乗り越えた上、片脚にやや障害が残るものの元気に飛び回り、止まり木にも止まることが可能であったことから、野生復帰後もトビとして生き残ることが可能であると判断し、放鳥しました。手術を乗り越え、元気になってくれた分、今後も元気に大空を羽ばたき続けてくれることを切に願うばかりです。



写真4 抜ピン前のレントゲン画像



写真5、6 抜ピン後のレントゲン画像

《表紙の動物》

表紙の野鳥はフクロウです。路上で飛び立えず、うずくまっているところを保護されました。

フクロウは映画やフクロウカフェで注目を集めていますが、元々人馴れしにくくストレスを感じやすい動物です。商業施設でフクロウが飼育・展示されている状態は非常にストレスがかかり、場合によっては動物虐待となるかもしれません。フクロウはワシントン条約にて付属書Ⅱに記載されているため飼育に関しても注意が必要ですね。

今回保護されたフクロウは神経的な異常により起立不能となっていました。今現在は、少しずつ起立もできるようになりゆっくりですが快方に向かっています。このフクロウも無事放鳥を迎えられるといいです。



2019年8月1日から2020年3月31日までに
野生鳥獣保護管理基金に下記の皆様（敬称略）より御協力頂きました。
誠にありがとうございました。（あいうえお順）

アイラ動物病院（広島県）	永江 則崇（鳥取県）
あやめ池動物病院（奈良県）	西田 内科（鳥取県）
井上 春奈（高知県）	藤井 久恵（鳥取県）
笹間 晴美（鳥取県）	ペットの病院カトウ（長崎県）
十亀 沙理（兵庫県）	山下 茂（鳥取県）
(公財) 中海水鳥国際交流基金財団（鳥取県）	和田獣医科病院（京都府）
中島 孝外（鳥取県）	

編集部だより

Pinyo 第36号をお届けしました。

今年の冬は全国的にも暖冬で、山陰も雪が少なく過ごしやすい日々でした。しかし、新型コロナウイルス感染症が猛威を振るっており、あまり穏やかな冬とはいえませんでした。

始めは中国で始まったはずの新型コロナウイルスも気づけばヨーロッパに広がり猛威を振るっています。やはり感染症のパンデミックを経験すると、世界は小さくなったのだなと体感し同時に "One World One Health" を強く意識させられます。一日でも早く、感染者を最低限に終息してくれことを願っています。

.....

公益財団法人 動物臨床医学研究所 野生どうぶつ友の会

〒682-0025 鳥取県倉吉市八屋 214-10
Tel 0858-26-0851 / Fax 0858-26-2158
E-mail dorinken@apionet.or.jp / URL <https://d-wildlife.com/>

.....

ニュースレター「Pinyo」 Vol.36 (2020年3月)
発行：公益財団法人 動物臨床医学研究所 野生どうぶつ友の会
編集：河合紀人